

# 令和8年産 特別栽培米「奥出雲千石米 コシヒカリ」栽培暦

月日	4月					5月					6月					7月					8月					9月																													
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25																									
生育段階・区分	育苗					活着					有効分けつ					無効分けつ					幼穂形成 穂ばらみ					登熟																													
技術内容	播種										有効分けつ決定期					最高分けつ期					幼穂形成期					穎花分化期					減数分裂期					出穂期					穂ぞろい期					成熟期					収穫期				
水管理																																																							
技術内容	<p>◎健康な苗づくりを！</p> <p>堆肥施用 深耕 稲わら腐熟</p> <p>できるだけ外気温にならして健苗育成 硬化期は温度管理に注意しながら 薄まきの励行（乾籾100g〜120g/箱）</p>					<p>◎基肥は控えめに！</p> <p>有機物多用田では減肥</p>					<p>◎植え付けは適正に！</p> <p>・植付け株間は23cm程度 ・一株植付け本数 3〜4本</p>					<p>◎水管理の徹底</p> <p>・中干し（一畝一〇本になった時） ・作溝の実施</p>					<p>◎穂肥は適期に適量を！</p> <p>葉色・茎数を確認し生育に応じた施用を実施する。 有機質肥料は緩効性のため出穂前二五を目途とする。</p>					<p>◎仕上げは万全に！</p> <p>・カメムシ防除</p>					<p>・稲わら腐熟促進</p>					<p>・網目一・九〇使用 ・水分一四・〇〜一五・〇％ ・適正な乾燥へ急激な乾燥は避けゆつくりと ・青味籾率一〇〜一五％ ・適期刈り取り ・適期落水（完全落水は出穂の30日後）</p>					<p>・登熟期後半は間断灌水</p>														

## ◆施肥設計例(10a当り)

### 粒状肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
堆肥	(※)1000						
田んぼの守	60			1.8	1.8	2.58	
優作	35			3.5 「1.7」	3.5		
※ホスピタ (下記摘要参照)		20		1.0		2.3	
けい酸加里 プレミア34		(※)20			4.0	0.8	
優作			20	2.0 「0.98」	2.0		
合計				5.5 「2.69」	8.3	11.3	5.68

### 一発肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	成分量(kg)			
			窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量					
堆肥	(※)1000					
田んぼの守	60			1.8	1.8	2.58
※ホスピタ (下記摘要参照)	40			2.0		4.6
けい酸加里 プレミア34	40				8.0	1.6
すご稲有機355	42		5.46 「2.67」	2.1	2.1	
合計			5.46 「2.67」	5.9	11.9	8.78

### ペースト肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
堆肥	(※)1000						
田んぼの守	60				1.8	1.8	2.58
プレーバーペースト 734	45			3.15 「1.58」	1.4	1.8	
※ホスピタ (下記摘要参照)		20			1.0		2.3
けい酸加里 プレミア34		(※)20				4.0	0.8
優作			20	2.0 「0.98」	2.0		
合計				5.15 「2.56」	6.2	9.6	5.68

- (※)堆肥の施用量は、湿田、暗渠の有無などの圃場条件や土壌診断に基づいて決定する。
- (※)窒素肥料の施用量は、土壌診断及び稲の生育状況により散布量を減らす。
- (※)ホスピタは、初期成育の茎数を確保するため基肥で施用するか、根張りを良くするため中間追肥で施用する。
- (※)けい酸加里プレミア34を中干し前(田植後30日〜35日)に施用する。

## ◆栽培での注意事項

栽培資格 栽培要件	JALしまねの定める特別栽培米基準に基づき、適切な栽培管理を実施し栽培の記録を行う。
栽培目標	土づくりを基本とし、健苗育成、適正防除・施肥・水管理等を徹底する。また、収量を第一とせず、品質(整粒歩合)・食味の向上に重点を置く。
土づくり	稲わらを腐熟させるために、秋起こしを実施する。地力増進を図るため、完熟堆肥等を施用し、品質、食味向上、収量改善のため、土づくり肥料(推奨品目: 田んぼの守60kg/10a)を施用し、稲体の健全化を図る。また、深耕は18cmを目安とする。
施肥	肥料は層に基づき有機態窒素入り肥料を施用し、施肥量は化学肥料の窒素成分で10a当り2.75kg以下(慣行栽培の5割以下)とする。
育苗・田植	特別栽培米の種籾は、無消毒種子の温湯消毒種子または、微生物農薬による消毒種子を用いる。健苗育成を行うため薄播き(乾籾120g程度)とし、1株当り3〜4本植えとする。茎数並びに収量確保のため、また登熟向上を図るため田植え時期を5月上旬から中旬とする。
水管理	過繁茂を防止し稲体の健全化を促すため、間断灌水や中干し等、基本管理を徹底する。また、品質向上(整粒歩合)を図るため出穂後30日頃まで間断灌水を行い、早期の完全落水をしなす。
病虫害防除	畦畔の草刈り等を徹底し、病虫害防除に努める。農薬を使用する場合は、種子消毒、防除剤を含め、栽培暦に基づき農薬を使用する。なお、指定薬剤以外の薬剤防除が必要な状況が生じた場合は、関係者が協議し、追加防除を行った圃場の米は慣行栽培米の扱いとする。

## ◆農薬使用基準(成分回数8回以内)

- 注1)〇内の数字は成分回数を表します。
- 注2)農薬使用基準を正しく守りましょう。

種子消毒剤	特別栽培米の種籾は、無消毒種子の温湯消毒種子または、微生物農薬による消毒種子を用いる。		
育苗箱施薬	稲名人箱粒剤②		
除草剤	体系 初期期	先陣ジャンボ②又は先陣1キロ粒剤②又は先陣200FG②	
	初中期	オイカゼZジャンボ②又はオイカゼZ1キロ粒剤②又はオイカゼZ250FG②	
本田防除	出穂期	〈カメムシ・ウンカ類〉 クラブフロアブル①又はクラブ粉剤①	収穫14日前まで
	穂ぞろい期	〈カメムシ・ウンカ類〉 スタークル液剤10①又はスタークル粉剤DL①又はスタークル豆つぶ①又はスタークル粒剤①	収穫7日前まで
	混用例	〈いもち病 カメムシ・ウンカ類〉 *カスミン液剤× クラブフロアブル①又はスタークル液剤10①	
		〈紋枯病 カメムシ・ウンカ類〉 *バリダシン液剤5× クラブフロアブル①又はスタークル液剤10①	
		〈稲こうじ病〉 *ドイツボルドーA	

\*の薬剤は農薬成分回数の対象外